



時間生物学は、生物時計の普遍性やリズム現象の特性から極めて学際性の強い学問分野であり続けてきた。原核生物からヒト、さらには社会科学までもその守備範囲に収まる、他にない生命科学領域と言える。したがって、学会設立の初期から極めて基礎的な研究を志向する研究者と、極めて応用的あるいは疫学的研究を専門とする研究者が、一つの学会に集い共通の言葉を用いてコミュニケーションできるという稀有な学術コミュニティを形成していた。概日リズムなど生物リズムという地球環境と生物の営みをつなぐ「身近で普遍的な自然現象」を対象とした学問であることが、通常は同じ言語を使わないほど離れた学問領域の研究者たちを集わせることを可能にした理由であり、他の生命科学分野には見られない魅力であったのではないかと考えている。

時間生物学会は、基礎系の「生物リズム研究会」と臨床系の「臨床時間生物学研究会」が一つになって始まった学会である。それぞれ前身の研究会においてもそれぞれの比率で基礎的視点と応用的視点を取り込んで展開されてきたようである。今の国の科学政策をめぐる「基礎 v.s. 応用」の対立軸は、こと時間生物学においては全く対立とはならないということだ。もともと一緒にやってきたのである。あるいは、生物時計の本質的な理解には、むしろ両方の視点から考えることが必須だと言っても良い。初心に戻って、時間生物学の原点を思い出してみたい。それは、「地球環境と生物の営みをつなぐ生物時計と生体リズム」を理解することを目的とした学問分野であり、この意味で、シフトワーカーの健康問題やサマータイムの問題なども「生体リズム」の本質やそのメカニズムの理解に必要な重要テーマなのである。また、同時にこれらの社会的課題に対し、研究成果に基づいた見解を学会として社会に発信してきた歴史も忘れてはならない。つまり、基礎研究であっても現実の社会で起こっている問題を深掘し、そこに潜む生物時計の原理にまで思いを至らせることが、ひいては基礎研究の進展に有用である。また、一方で、応用研究や疫学研究に携わる場合でも、生物時計の原理に思いを致し、地球の自転周期や公転周期と生物の内的環境との関わりを考えながらリアル・ワールドから取得したデータを読み解く。時間生物学とは、そのような学問であり、時間生物学会とはそのような場を提供するものなのではないか。全員が一つの方向を向く必要はないし、向くべきではないのかもしれない。新しい生命科学あるいは医学研究、また物質科学研究や地球科学研究、などいろいろなチャレンジが創出される『場』としての可能性が、時間生物学会にはあるように思う。そして、その『場』としてのポテンシャルを発揮するには、昨年の大会長である沼田先生が掲げられた「多様性」は非常に重要なキーワードだ。ただ、ある意味で理想論である「多様性の実現」を本当に実現するには、相手を変えるのではなく、自分の考え方を少し柔軟にしてみる、といった歩み寄りが有効なのではないかと考えている。これが、「基礎と応用の共存」である。基礎研究の人は臨床や疫学の人の視点で自分の研究対象を見てみる。また、臨床・疫学の人は生物時計の原理を追求する基礎研究者の視点を自分たちの研究でデザインに取り入れる。「多様性の実現」はこのような「相互理解」と「寛容」、そして「越境する勇氣」があつてこそ、理想論から現実的目標となる。

「基礎 v.s. 応用」の対立軸ではなく、「両方ともやればよい」という考え方は、今の日本の生命科学が抱える問題の一つのソリューションになると密かに思っている。もちろん、いま、我々は急激な変革の時代にあることは間違いない。これまでどおりではやはりダメで、時代に即した変化あるいは適応は、ある程度必要だと私も考えている。しかし、本質的に時間生物学は、他の分野と比べても、いまの生命科学の激変トレンドに親和性は高いと思う。時間生物学会が新たな価値を生み出す『場』を提供し、これを活用して様々な試みをやってみるのも良いのではないか。もういわゆる「正解」などない時代である。新しい価値を創造するのに、アイデアを試してみる『場』は必須であるが、我々にはそれがある。時間生物学会は、それを赦す「寛容」を持ち合わせているように感じる。「越境する勇氣」を持つ者にダメ出しではなく、温かい励ましと助言を惜しまない先生方も多い。このような試みの中から、有効なモデルケースが生み出されるはずである。このような思いから、私たちとしても「Multi-Scope」とまでは難しいが、これからも概日時計の原理解明とリアル・ワールドの課題解決を目指した『Dual-scope of Circadian Biology!』を掲げ、挑戦し続けるつもりである。